

2024 年度

国 語
(3期)

(答はすべて解答用紙に記入すること)

(時 間 50分)

番 号		氏 名	
--------	--	--------	--

清泉女学院中学校

〔一〕 次の【A】・【B】の文章はどちらも「方言」について書かれた文章です。これらの文章を読んで後の問いに答えなさい。（字数制限のあるものについては、すべて句読点や記号をふくみます。）

【A】

これは私のまったくの個人的な体験に基づく感想なのだが、男性にとつて、結婚の挨拶のために相手方の家に伺う時に「表ボス」として立ちただかるのは、相手の父親が一般的な気がする。少なくとも私にとってはそうであった。しかしである。実際に結婚すると、付き合いをより気にするべき「真のラスボス」は、相手の母親、A 義母となる。義父には一回、結婚相手として認められればOK！「後は好きにしてくれ」的な雰囲気になりなんとかなる。しかし、義母とはどんどん付き合いが深くなる。ほら、ドラクエでも表ボスは一回倒せばおしまいだけど、裏ボスには何度か挑みたくなるじゃない？あれと似ている気がする。妻の実家に一緒に帰れば、義母に色々お世話になることになり、気を遣う。結婚した後も「娘がこの人と結婚して良かった」と安心してもらいたいのは、人として自然な感情じゃないか？

というわけで、義母とのお付き合いを深めたい今日この頃であるが、言語学者の悲しい性分で、やはり方言に聞き入ってしまうのである。そんなわけで、義母との思い出を振り返りながら、私が好きな義母の方言を勝手に紹介しよう。もちろん前話でお話したように、義母の鼻濁音は相変わらず大好きであるし、「ん」から始まる単語には今でもしびれるが、せっかくだから今回は別の観点から、単語や表現の方言による違いについて勝手にランキング形式で紹介させていただきます^①。

第1位は、こちら。義母はよく朝食時にこんな言葉をかけてくださる。

「しげとさん、それでまにあう？」

どういう状況か想像してみたい……。

私の東京方言の枠組みで理解すると「しげとさん、今日はお仕事でしょう。そんなにゆっくり食べていて時間は平気？」という意味になる。この意味だと、私は責められているわけだ。「もっと早くご飯食べなさい！ さっさと仕事に行きなさい！」。しかし、義母は私を急かしているわけではない。義母の意味するところは「しげとさん、それでお腹いっぱいになる？」で、これは気遣いに溢れた優しい言葉なのである。私の方言で

は「間に合う」という表現は **X** にしか用いない。しかし、義母の方言では **Y** にも用いるのだ。方言好きの私は、義母のこの表現がたまたまなく好きである。

第2位は、こちら。

「ちよつと、このゴミなげておいて」

え？ お義母さん、家の中でゴミを投げちゃって平気でしょうか？ 散らかってしまわないでしょうか？ 子どもに非日常的な遊びをさせるにしても、ちよつとワイルドすぎるんじゃないかと……。と思ってしまうが、これも私にはたまらない東北の表現で、義母の意味するところは「ゴミを捨てておいて」である。義母のこの台詞を聞く度に、私は娘たちと一緒にゴミをぶん投げて妻の実家をぐちゃぐちゃに汚す想像をしてクスツとする。いや、別にそのような潜在願望あるわけではない。たぶん。

第3位。義母は、義父や娘（＝私の妻）と同意する時に「んだっちゃ、んだっちゃ」と言うが、これが『うる星やつら』のラムちゃんみたいで可愛い。しかし、意味が異なるので注意が必要だ。義母の「んだっちゃ」はあくまで同意を示すために使われる。東京方言で言うところの「うんうん。だよね〜」くらいの意味だろう。一方、ラムちゃんの「だっちゃ」は、文末につけることで「私はラムちゃんだよ」ということを示している。後者は「役割語」と呼ばれる。例えば「おじいちゃん」を表すための「んじゃ」、「お待さん」を表すための「でござる」などは日本語の漫画でよく使われる役割語だ。ファイナルファンタジー（FF）シリーズに登場するモーグリ「くポ」も好例。簡単に言って、役割語は「話し手がどんな人か」を明示する。しかし、義母はラムちゃんでない。当たり前だが。

最後は「へずる」。これは妻も使うので、私も使おうと思うのだが、どうしても微妙なニュアンスを身につけられない。「へずる」は「自分の食べものが多めなので、他の人に少しゆずってあげる」程度の意味として理解している。ただ、「ごはん」にも「お肉」にも「お茶」にもなんでも「へずる」という表現を使っているのかというところでもないらしい。「お肉」も形状によってへずれる場合とへずれない場合があり、使いこなしが難しい。川原家では私が「へずる」という単語を使って、妻に「それ、使い方違う」と突っ込まれる光景が往々にして観察される。

他にも「もぞっこい」「いずい」など、東北育ちでないとなかなかニュアンスを理解し難い表現がけっこうある。しかし、そこが楽しい。方言を心から楽しめるというのは言語学者の特権かもしれない。あ、そうだ、大事なやつを忘れていた。方言は関係ないが、この間「バカオライスクが見つからない」。バカオライスク」と連呼してらっしゃいましたが、お義母さん、それ「ガパオライスクです……」。音声学的に言うとは、ひっくり返っています。

さて、私の義母への憧れはさておき、もう少し真面目な話をする、私は「日本人はもつと方言の違いを楽しめばいいのにな」と思う。世間では、何かと方言はからかいのネタにされている気がする。東京方言と違う発音をすれば「なまってる」とからかわれがちだ。東京に移住しても、堂々と自分の方言を使い続けるのは関西の方がほとんどで、自分の生まれ育った地方の方言を隠そうとする人も少なくない。

そんな観点から、アニメに目を向けると、関西方言のキャラは少なくないが、他の方言をしゃべるキャラはあまりいないと妻がぼやいていた。『ドラゴンボール』のチチはそうだが、東北方言をしゃべれば、なんとなく「田舎者」というレッテルを貼られているように感じる。しかし、言語学的な観点からは、東京方言以外の方言が、東京方言に劣っているという根拠はない。義父母や妻と会話する度に、もつと方言の多様性を許容する社会になってほしいと言語学者として思う。そういう意味では、競技カルタを題材とした漫画『ちはやふる』には好感が持てた。福井県出身の綿谷新が福井方言を理由に同級生に苛められていたが、それを主人公の綾瀬千早が諫めるのである。千早のような人が増えてくれれば、日本はちよつと変わるかもしれない。

B、方言を理解することは、学問的な好奇心を満たすだけでなく、社会的な意義も持つ。

方言学を専門とする同僚からこんなエピソードを聞いたことがある。東北の方言では完了形（「痛かった」）が現在の出来事（「痛い」）を示すことがあるらしい。東北の震災の時に、被災した方が完了形を使ったものだから、東京出身のボランティアは「痛いのは過去のことだ」と勘違いを
してしまい、処置を怠ってしまったという。しかし、その方は現在の痛みを訴えていたわけで、症状が悪化してしまったとのこと。また、同じ現場で「背中がざらざらする」と相談があって、その方言を知らない人が「別に背中にできものができているわけではないから大丈夫ですよ」と追
い返したこともあったとか。でもこれは、本当は「背中がぞわぞわする」という意味で風邪だったらしい。これらの事例は、方言を理解すること

がいかに大事かを如実に語るエピソードとして私の心に残っている。

(川原繫人『フリースタイル言語学』より一部改変)

【B】

方言とは、特定の地域と結びついた言語の下位区分であるわけですから、ある程度以上の歴史と使用人口をもつ言語であれば、方言をもっている可能性は十分にあります。

例えば同じブリテン島（イギリス）の英語であっても、イングランド・スコットランドなど、地域によりさらに細かい違いがあります。また方言とは、決してひとつの国の中だけに存在するものではありません。ブリテン島の英語とアメリカの英語が違うことはみなさんもご承知でしょう。このほかインドの英語・シンガポールの英語・オーストラリアの英語などそれぞれに独自の特徴をもち、ほかとかなりはつきり区別することができます。これらすべて、「英語諸方言」であるとと言えます。

さきほど、方言は特定の地域と結びついたもの、と書きました。そこで、広い地域で話される言語ほど方言差も大きいように思われるかもしれませんが。C 正確に言うと、方言とは、その土地に住む人間の「社会的集団」と結びついたものなのです。

長期間にわたって同一地域に定住し、人の移動があまりおこらないような場合ですと、その土地独自の「社会的集団」が形成され、この結果はつきりした方言差も生まれやすくなります。逆に短期間のうちに大規模な人の移動がおこなわれたような場合は、土地と結びついた「社会的集団」が生まれにくいので、方言の違いも生まれにくくなります。広いアメリカ本土より、狭いブリテン島の方が方言差は大きいのですが、それはこのような事情によっています。

言語としての歴史も長く、かつ広い地域で話されている中国語ともなると、方言の差異も非常に大きくなります。例えば、「私はまずあの人に

本を一冊あげます」ということを、北京、広州の方言でそれぞれ表現してみると以下ようになります（※2声調表記は省略）。

北京方言…私 ワキ シェン 与マえユる 彼 タ一冊 イ一冊 本本
広州方言…私 シ与ベえイる 一冊 本本 彼 コ一冊 本本

それぞれの単語の形がかなり違うだけでなく、語順もかなり異なっています。音だけを聞いたのでは、これらが同じ言語であるとはとうてい思えません。また実際に、広州の人が自分の方言で話したら、北京の人にはほとんど理解できません（北京の方言は中国の標準語^⑧となっていますので、広州の人は北京方言を聞けば理解できますが）。

これだけ差が大きくても、北京・広州のことばはそれぞれ独立の「言語」とは考えられずそれぞれ中国語の下位区分である「方言」とされています。その反面、ノルウェー語とスウェーデン語は、一人がノルウェー語で、もう一人がスウェーデン語で話しても十分に意思疎通^⑨が可能な程度に似通っていますが、それでも別々の言語とされ、同一言語の方言同士とは考えられていません。それはなぜでしょう。

実は、方言と言語との違いは、言語学的な要因によって決まるのではなく、それを話す人々の意識によって決まるのです。北京の人と広州の人は、たとえ話は通じなくても、共通の文字と書き言葉を持ち、同じ「中国語」という言語を話しているという意識をもっており、こういう場合は「方言同士」という扱いになります。一方ノルウェーの人とスウェーデンの人にはこうした共通意識がないため、別々の言語として扱われるのです。

（う字さ佐み美よ洋「ことばの疑問 外国語にも方言はあるのですか」より一部改変）

※1 諫める…まちがいをあらためるように言う。

※2 声調…音の高低と上げ下げのしかたのパターン。

問一 A C に入る言葉としてもっともふさわしいものはどれですか。次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。(ただし、それぞれの記号は一度しか使えません。)

ア たとえば イ しかし ウ やはり エ ちなみに オ つまり

問二 ──線Ⅰ「しょうぶん性分」、Ⅱ「往々にして」、Ⅲ「レッテルを貼は(る)」の言葉の意味としてもっともふさわしいものはどれですか。次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

Ⅰ「性分」

ア 間違った考え方

イ 生まれついでの性質

ウ 直したいくせ

エ 備わった知識

オ よく行う行動

Ⅱ「往々にして」

ア 物事がまったく生じないこと

イ 物事が起こるのが珍めづしいこと

ウ 物事が常に見られること

エ 物事がよくあること

オ 物事が起こるようにすること

Ⅲ「レッテルを貼る」

ア 一方的に評価をすること

イ 間違った判断をすること

ウ 不快なことを言うこと

エ 評判を広めること

オ 勘違かんちがいをすること

問三 — 線①「させていたただこう」とありますが、「させていたただく」という言葉は、使い方によっては違和感を覚える人がいます。次の①〈

⑥の〈比較的違和感のない場合〉と〈比較的違和感のある場合〉の文章を比べ、「させていたただく」に違和感があるかどうかを分ける要因としてふさわしいと考えられるものを後のア～オの中から二つ選び、記号で答えなさい。

〈比較的違和感のない場合〉

- ① 免許証めんきょしょうを確認めいんさせていただきます。
 - ② 先生に教室を使用しさせていただきます。
 - ③ ここでの飲食は禁止しんさせていただきます。
- 〈比較的違和感のある場合〉

- ④ すばらしい発表に感動かんとくさせていただきます。
 - ⑤ 昨年度、S小学校を卒業そつぎょうさせていただきました。
 - ⑥ ソフトボール大会で優勝ゆうしょうさせていただきました。
- ア 動作を行うことを聞き手がいやがつているかどうか。
- イ 動作に聞き手の存在や役割が必要であるかどうか。
- ウ 動作を行うことそのものが難しいかどうか。
- エ 動作を行うことで話し手が利益を得るかどうか。
- オ 動作が聞き手に許可を得て、させてもらうものかどうか。

問四 — 線②「東京方言」とありますが、このように文章【A】の筆者は首都で使われている言葉を「方言」と述べています。しかし、— 線

⑧のように、一般的には首都で使われている言葉を「標準語」と表現することも多くあります。文章【A】の筆者が「方言」という言葉を使うのはなぜだと考えられますか。もつともふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 首都で使われている言葉を「標準語」と表現すると、「自身の義母の方言が好きである」という筆者の考えが、義母を見下しているように見えてしまうかもしれないと筆者は心配しており、その勘違いを正したいと思っているから。

イ 首都で使われている言葉を「方言」と表現することで、首都圏に住んでいる人々にも、自身が使っている言葉がたまたま「標準」なだけであると自覚させ、首都圏に住んでいる人々の間違いを正したいと筆者は強く願っているから。

ウ 首都で使われている言葉を「標準語」と表現すると、日本語の方言は中国語のそれと同じく、異なる地域で話すと理解してもらえないと誤解されてしまい、そのような誤解が増えると日本がばらばらになってしまうから。

エ 首都で使われている言葉を「標準語」と表現すると、それ以外の地方の方言は標準でなく、劣っているという印象を与えてしまい、東京以外の地方の方言の使用者が方言を使わなくなり、方言の多様性が損なわれる可能性があるから。

オ 首都で使われている言葉を「方言」と表現することで、現在、世界各国で使われている英語諸方言と同じように、東京で使われている言葉も方言として、世界中で使われる可能性を持つ優れた言葉であると読者に伝えたいから。

問五

【X】と【Y】に入る言葉の組み合わせとしてもつともふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア X…否定的な表現 Y…肯定的な表現

イ X…肯定的な表現 Y…否定的な表現

ウ X…時間的な尺度 Y…量の尺度

エ X…量の尺度 Y…時間的な尺度

オ X…分かりやすいセリフ Y…分かりにくいセリフ

カ X…分かりにくいセリフ Y…分かりやすいセリフ

問六 — 線③「役割語」とありますが、二〇〇八年の北京オリンピックについての報道で、ジャマイカの陸上選手であるボルト氏の発言につけられた日本語字幕では、一人称として「オレ」が用いられました。一方、二〇一七年に行われたインタビューでの日本語字幕では「私」が用いられました。このような変化について説明した次の文章の(1)と(2)に当てはまることばを本文と次の〈参考資料〉を元に考え、それぞれ二〇字以内で答えなさい。

役割語の持つ(1)という働きを活かし、以前は、スター選手を想起させる男性役割語である「オレ」を用いていたが、近年では(2)を避けるため「私」を用いるようになったと考えられる。

〈参考資料〉

まず、役割語は現実の人物の日常的なリアルな話し方について規定するものではありません。たとえば「すてきだわ」のような表現はいかにも女性的に感じられるので、私たちはこれをへ女ことばの一要素として捉えますが、そのことは「女性の日本語話者は必ずそのような表現を用いる」とか、ましては「女性の日本語話者は用いるべきだ(用いた方がいい)」ということを主張するわけではありません。そうではなくて、「すてきだわ」のような言い方を多くの日本語話者が「女性的である」という知識を共有している、という点に着目したいのです。

このように、「実際にそうであるかどうか」はともかくとして、「こういうグループの人間はえてしてこういう性質を持っている」という知識が社会で広く共有されているとき、その知識のことを「ステレオタイプ」と言います。たとえば「女性は男性よりも感情的な行動を取りやすい」といった知識です。ステレオタイプな知識はしばしば偏見や差別と結びつきやすく(たとえば「だから女性をリーダーにするのは避けよう」などという判断に結びつけるなど)、社会的な弊害も大きいのですが、一方でなかなか排除が難しいという性質も持っています。役割語は、言語のステレオタイプと言うことができます。

(金水敏『役割語小辞典』より一部改変)

問七 — 線④「千早のような人」とありますが、これはどのような人ですか。もっともふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 東京以外の地方の方言を使っている人を差別せず、言葉の違いによる差別を見過ぎさないような人。
- イ 人一倍正義感を持っており、クラスで苛められている人を見かけたら助けるような人。
- ウ 方言を中心に言語学的な知識を持っており、他者の使う言葉に興味関心を持っているような人。
- エ 福井方言を恥^はずかしいものだと思っておらず、積極的に話すように強要するような人。
- オ 方言の多様性を許容する社会を目指し、その実現に向けて日々行動しているような人。

問八 — 線⑤「社会的な意義も持つ」とありますが、方言を理解することはどのような点で社会的意義を持つと筆者は考えていますか。もっともふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 方言を理解することで、自分と異なる地方の方言を使う人々とも意図を取り違えることなくコミュニケーションをとることができ、そのことによって現実的な問題に対応できる点。
- イ 方言を理解することで、東京以外の地方の方言を楽しむことができ、その方言と自分が使っている言葉との微妙^{びみょう}なニュアンスの違いを楽しむことができるようになる点。
- ウ 方言を理解することで、東北地方でボランティアをする際にも、現地の人の発話内容を勘違いすることなく会話をすることができるようになり、東北地方により多くの貢献^{こうけん}ができる点。
- エ 方言を理解することで、東京以外の地方の人々とも会話することができるようになり、その結果起こるかもしれない医療^{いりょう}ミスを防ぐことができるようになる点。
- オ 方言を理解することで、東京以外の地方に行つて会話をするとときに、その地域の人が発した言葉の意味を取り違えることなく正しく理解することができるようになる点。

問九 — 線⑥「このような事情」とありますが、これはどのような事情ですか。もっともふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 方言差の大きさは、「社会的集団」があるかどうかによって決まり、アメリカはブリテン島より「社会的集団」が生まれやすいという事情。

イ アメリカとブリテン島では、どちらも過去に大規模な人の移動が起こったために、現在、大きな方言差が生じているという事情。

ウ アメリカとブリテン島では、面積が大きく異なるが、方言差の大きさは二つの国の面積の差に比例することはないという事情。

エ アメリカとブリテン島では、土地に結びついた「社会的集団」の生まれ方に差があるため、方言の差の大きさが異なっているという事情。

オ 方言差の大きさは、その言葉の使われている土地の広さではなく、人の移動がどの程度起こったかなどのような他の要素が決定付けるという事情。

Köü hai Yatbunyan.

かれ彼は日本人です。

Köudei m hai Hönggongyan.

彼らは^{ホンコン}香港人ではありません。

Nei hai m hai Hönggongyan a?

あなたは香港人ですか？

Köü höü Hönggong.

彼は香港に行きます。

- (1) Köü hai Hönggongyan.
- (2) Neidei m höü Yatbun.
- (3) Nei höü m höü Hönggong a?

(広東語は一般的には漢字で表記されますが、ここではラテン文字で表記し、声調表記を省略してあります。)

問十一 まったく異なる北京の言葉と広州の言葉を別言語とせず「方言」とし、似通っているノルウェー語とスウェーデン語を別々の言語ととらえるのはなぜですか。もっともふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 方言と言語は、客観的に判断できる物事で決定しているのではなく、個人によって判断が分かれるようなほんの少しの差によって決まっているものであるから。

イ 方言と言語は、実際に使われている言語が異なるかどうかによって決まるのではなく、同じ言語を使用している意識を持っているかどうかで決まるものであるから。

ウ 方言と言語は、東京方言とそれ以外の地方の方言に優劣ゆうれつがないように、両者に違いがないため、その違いは個人によって判断が分かれてしまうものであるから。

エ 方言と言語は、「社会的集団」の有無によって判断されるものであり、「社会的集団」の有無の判断はその土地に住む人々にしかできないものであるから。

オ 方言と言語は、似通っている言葉でも別々の言語ととらえたり、まったく異なる言葉を方言としたりすることがあるように、判断基準きんじゅんが曖昧あいまいなものであるから。

〔一〕

次の文章を読んで後の問いに答えなさい。(字数制限のあるものについては、すべて句読点や記号をふくみます。)

メトロポリタン美術館、二階、十九〜二十世紀初頭ヨーロッパ絵画ギャラリー^{※1}。

I 「Let's be Picasso: Workshop for kids (ピカソになろう——子供たちのためのワークショップ)」と題したワークショップは、土曜日^①の午後三時から開催される予定になっていた。

ワークショップのタイトルは、直前まで「Let's learn with Picasso: Workshop for disabled kids (ピカソと学ぼう——障害を持つ子供たちのためのワークショップ)」となっていた。アネットがつけたタイトルだったが、美青はこれに反対した。

よくよく考えてみたのだ。なぜ「障害のある子供」とわざわざ言わなければならないのか？ つまり、すべての子供に向けたワークショップにすればいいのだ。その中に、障害を持った子供がいたっていい。障害のあるなしで分けずに、一緒に参加すればいいじゃないか。

ワークショップ直前の変更に、当然アネットは賛同しなかった。

「健常者向けのワークショップなら、なんのニュースバリューもないじゃないの。障害者向けのワークショップをうちの看板キュレーター^{※2}がやる、っていうところがポイントなのよ。マスコミの取材もせっかく入るんだし、いままら変更なんてできっこないでしょう」

「お願いします」

美青は食い下がった。今回だけは引き下がれない。絶対に引き下がってはいけないのだ。

「これが私の、最後の仕事ですから」

そうして、美青はアネットに打ち明けた。

二週間まえ、ミッドタウンの眼科医を訪ね、そこで紹介を受けてニューヨーク州でもっとも権威ある眼科の病院で受診した^②こと。そこで「glaucoma」という、聞きなれない病名を告げられたこと。

その病気が、ほとんど手がつけられないほど進行してしまっていること。

進行を遅らせるための緊急手術を受け、うまくいけばしばらくはしのげる。けれど、完治することはない。

いずれにしても、近い将来、視力を失うだろう。

それが、医師が美青に告げた結論だった。

「ドクターの話聞きながら、あわてて電子辞書で意味を調べました。生まれて初めて聞く単語だったので。美術用語以外で辞書使ったの、久しぶりだったな」

そう言って、美青は苦笑いをした。

辞書の画面に、緑内障、と出てきたときにはぴんときなかつた。ドクターの話聞いたところで、なんの実感も湧かない。視力がなくなるなんて、あり得ない話だ。

けれど、ネットであちこち調べるうちに、絶望は、しだいに重く、深くなっていっていった。

この病気は、自覚症状がない。

視力が低下し、視界が欠けて、見えづらくなる。見え方がおかしい、と気づいたときには、手遅れになっていることもある。

自分の症状とぴったりと一致していた。

口を、耳を、手を、足を奪われるのではなく、どうして目なの？

絶望の嵐は到底おさまりそうになかった。

職場に迷惑をかけるとわかっていながら、三日間、休んでしまった。母からのメールにも返事を書けなかった。食事ものを通らない。どこにも出かけず、誰にも会いたくなかった。

だんだんと欠けていく、この世界を恨んだ。

やがて、永遠の闇が訪れる。それは死を意味することなのではないか？

「そのとき、急に思い出したんです。初めて眼科のドクターの診察に行ったとき、出会った女の子のことを」

弱視の女の子、パメラ。

生まれたときから弱視だったと聞いた。どんどん進行している、とも。それなのに彼女は、あんなにもピカソの絵にのめりこんでいた。

まるで、まだ見えていることを確かめでもするように。

「あんなに熱中して作品に向かい合ったことが私にあったかな。そう思ったんです。子供の頃からアートが好きで、メトが大好きで、美術館で働くために一生懸命勉強したし、ライバルに負けまいと競争もした。年を取りつつある父と母を、ふたりきり、日本に残したままで」

美青は、父を、母を思った。子供の頃から、娘の好きなように、自由にさせてくれた両親を。

ひと言も、言わなかった。日本に帰って来いとも、会いたいとも。そう言ってしまったら、娘が心苦しく思うことを、わかっているのだ。そんな父と母に甘えて、勝手気ままに生きてきた。それもこれも、美術館で働くために。大好きなアートの、より近くで生きていくために。

——それなのに。

あの女の子の、「見る」ことへの情熱。切実な、ひたむきな。

自分には、そのかけられないじゃないか。

「メトにいられて、そのことだけに満足して、ほんとうにアートを見る目を失っていたんですね。もう、視力を失っていたも同然です」だから、このさきは心でみつめていく努力をする。

そのために退職して、手術をする。そう決心していた。

「そうだったの」

ひと通り聴き終わると、アネットは、独り言のように言った。

「じゃあ、もう気持ちちは固まっているのね」

「ええ」と、美青は少し鼻声になって答えた。

「アネット。あなたには色々教えていただきました。感謝しています」

「そんな……感謝だなんて」

アネットは首を振って、そのまま顔をそむけた。天井をにらみつけていたが、目尻を指先で拭くと、

「——キャロラインも、最後に言ったのよね。ありがとう、って。私、彼女にとってもあなたにとっても、いいボスじゃなかったでしょうに」

そして、潤んだ目を美青に向けて、言った。

「タイトルの変更に関わる調整は、責任を持ってできるわよね？」

美青は流れる涙をそのままに、明るい声で答えた。

「はい、もちろんです」

ギャラリーに、子供たちが集っている。

にぎやかに話をする子、少し緊張して前を向いている子。車椅子の上で笑っている子もいる。母親の膝の上に座りこんでときおり声を張り上げている子も。健全者も障害者も一緒になって、輪になっている。

「そろそろ時間です」

美青は、ギャラリーの袖に立って新聞社の取材を受けていたアーノルドに声をかけた。アーノルドはうなずいて、子供たちの前へと歩み出た。子供たちは、ギャラリーの真白い壁にかかっている、ピカソの「青の時代」の作品の前に集まっていた。

⑥「盲人の食事」、一九〇三年。ピカソ二十二歳、パリで画家修業を始めて三年。世間がこの天才を発見する以前の作品である。

どの作品を解説するかを決めたのはアーノルドだった。教育部門との最終確認で、この作品がリストに挙がっているのを見て、アネットは反対した。障害のある子供たちも来ているのに、この作品を解説するのは難しすぎる、と。

アーノルドの返答は見事だった。

a

と前置きした上で、彼はきっぱりと言った。

「けれど、ピカソが描きたかったのは、目の不自由な男の肖像じゃない。どんな障害があろうと、かすかな光を求めて生きようとする、人間の力なんです」

ほんとうに、その通りだった。

いま、ここでこうして眺める、青の時代。

急速に視力が落ちてしまった美青の眼には、それは不思議な色彩の広がりに見えた。真っ白なギャラリーの雪景色の中、みずみずしく湧き出する泉のような、青。

そこに描かれているのは、目の不自由なひとりの貧しい男の横顔。粗末なテーブルの上にはナプキンと皿。左手にわずかばかりのパンを握り、右手は水差しを、たったいま、探り当てたところだ。

青く沈む、静寂の画面。

美青は、子供の頃にこの作品を見たときのことを、急に思い出した。

あの水差しには、何が入っているんだろう。

そう思った。そして、願ったのだ。

ワインが入っていますように。そうしたら、きっとこの男の人は嬉しいはずだ。それか、ミルク。オレンジジュース。そうだ、コーラかも？
とにかく、b 飲み物が、あの中に入っていますように。

そして彼が元気を出してくれますように。

そんなふうに、願ったのだ。

「こんにちは。メトロポリタン美術館へようこそ。僕はアーノルド。君たちが絵の世界を旅するための、^{※5} ツアーコンダクターです」
アーノルドは、そう自己紹介した。そんなことを言うキュレーターを初めて見た。美青は思わず頬ほおをゆるめた。

「まず初めに、君たちにお願ねがいがある。最初に旅をする絵の世界は、このピカソの絵。君たちには、それぞれ、自分がピカソになったって想像してほしいんだ。さあ、君は右手にえんぴつ、左手にスケッチブックを持って……」

「僕、左利ひだりきです」と、ひとりの男の子が左手を上げた。笑い声が上がって、空気がなごむ。アーノルドは、「よし。じゃあ君は左手にえんぴつだ」と、笑いながら返した。

「そして、君はいま、この男の人と同じテーブルに座っている」

美青もえんぴつとスケッチブックを持ち、男と同じテーブルに座っていると想像する。

「さあ、何が見える？ 君は、彼のことをどう思ってる？ 彼のどんなどころを描いてあげようと思う？」

「彼は、かわいそう。目が見えないから」

前に座っていた女の子が言った。

「そうだね。じゃあ、君は彼に、どうしてほしい？」

「元気になってほしい」

「お腹いっぱい食べてほしい」

「友だちと、楽しくおしゃべりしたり、遊んだらいいと思う」

子供たちは、口々に叫んだ。アーノルドは、「そう、その通りだ」と嬉しそうに言った。

「その気持ちだ。それが画家の、ピカソの気持ちなんだよ」

美青は、知らず知らず、深くうなずいていた。

描く対象に深く寄り添った画家の心が見えるようだった。ピカソは、恵まれない人をそっくりそのままキャンバスに写し取りたかったわけじゃない。励ましたくて、この絵を描いたのだ。

子供の私は、ちゃんとそのメッセージを受け取っていた。だから、この絵の前からいつまでも動けなかったんだ。

ふと、ギャラリーの入口に親子らしき姿がぼんやりと見えた。遠慮せずに入るよう誘おうと、美青は音を立てないように入口へと近づいていた。すぐ近くまでやってきて、ようやく、このまえ眼科の待合室で会った母娘だと気がついた。

「来てくださったんですね」

美青は声を弾ませた。母親は、少し気まずそうな笑顔を作った。

「この子が、どうしても美術館に行ってみたいと言って」

そして、あなたに会いたいと言って。

母親は、そう打ち明けてくれた。

「こんにちは、パメラ。来てくれて嬉しいわ」

美青は、思い切り顔を近づけて、パメラに挨拶をした。ふっと小さな手が伸びて、ぐいっと美青の髪をつかみ、思い切り引き寄せた。そうしないと見えないのだろう。急接近して、パメラと美青の分厚い眼鏡がこつんとぶつかった。

「だめよ、パメラ。そんなことしたら……」

母親が止めようとするのを、「いいんですよ」と美青は制した。

「青の時代、見る？」

小さな頭が、こくん、とうなずいた。美青はパメラを抱き上げて、ギャラリーの中央へ歩んでいった。

子供たちは、思い思いに、床に広げたノートにスケッチを始めている。少女を抱いて、足音を忍ばせながら、美青はピカソの作品に近づいていった。

⑧ アーノルドは、美青に何か声をかけようとして、やめたようだった。そして、ふたりにそっと背を向けた。

美青はパメラを抱いたまま、その絵のすぐ前に立った。作品からほんの六十センチ。まるで、絵の中の人物の X が伝わってくるような距離に。

パメラは分厚い眼鏡の奥の小さな目を何度も何度も瞬かせて、夢を見るようなまなざしを一心に絵に向けている。

美青は、生まれて初めてこの絵を見たように、絵に向かい合った。

少女の美青が、いま、パメラと並んで、まっすぐに絵をみつめている。そして、願っている。あの水差しに、ワインが入っていますように。ミルクでも、オレンジジュースでもいい。彼のいちばん好きなものが入っていますように。

ふたりの少女は、青のさなかで、同じリズムで X していた。

満ちあふれる命の息吹き、かすかな光。

深く静かな、群青のさなかで。

(原田マハ『常設展示室』より一部改変)

- ※1 ギャラリー：絵画などの美術品をならべ、客に見せる所。
- ※2 キュレーター：美術館で、作品収集や展覧会などの活動にたずさわる専門職員。
- ※3 メト：メトロポリタン美術館の略。
- ※4 キャロライン：美青の前任で、アネットの助手を務めていた女性。病気で亡くなった。
- ※5 ツアーコンダクター：旅行に同行し、案内、誘導する人。

問一——線①「土曜日の午後三時から開催される予定になっていた」とありますが、この後に回想シーンが入っています。回想シーンが終わり、再び「土曜日の午後三時」に場面が戻るのはどこからですか。その場面がはじまる段落の最初の五字をぬき出して答えなさい。

問二——線②「美青は苦笑いをした」とありますが、なぜ美青は「苦笑いをした」のでしょうか。次の中からもっともふさわしいものを一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 今まで本当に美術のことばかりに気を取られていて、その他のことは体のことを含め本当に何も眼中になかったのだということに気づき、そんな自分が愚かしくもおかしくもあつたから。

イ 深刻な目の病気にかかっているということがわかったのに、この期におよんで美術のことばかり考えて何も手につかないでいることに気づき、そんな自分が愚かしくも悲しくもあつたから。

ウ 美術館員にとっては致命的な病気の名前も知らず予防もしないで、目の前の楽しいことだけを追い求めて軽薄な態度で過ごしてきたことに気づき、そんな自分が愚かしくも哀れでもあつたから。

エ 自分は健康で、好きなことは何でもできると思っていたのに、今後は障害をもって生きていかなければならないということに気づき、そんな自分が愚かしくもおかしくもあつたから。

オ これまで自分に正直に、美術のことだけを考えて生きてきて、自分が住んでいる国の言葉の習得をおろそかにしてきたのだということに気づき、そんな自分が愚かしくも悲しくもあつたから。

問三——線③「永遠の闇が訪れる」とはどういうことですか。「〜ということ。」という形にあうように答えなさい。

問四——線④「美青は少し鼻声になって答えた」とありますが、それはなぜですか。次の中からもっともふさわしいものを一つ選んで、記号で答えなさい。

ア ボスに改めて決心の程を尋ねられると、メトロポリタン美術館で働き続けたという未練がわいてきて心がゆらぎ、心細さをおさえることができなかつたから。

イ ボスに気持ちを確認められ、決心していたとはいえ大好きなメトロポリタン美術館を去ることが胸に迫り、寂しさ、悲しさを感ぜずにはいられなかつたから。

ウ 自分の病氣のことをボスに告げるのは勇氣のいることで、それを無事に終えて気がゆるみ、体調の悪さが一気に症状として出てきてしまったから。

エ 美術館員として致命的な病氣にかかってしまい、それをボスに伝えた今、いつクビになってもおかしくない状況の中で絶望的な気持ちになつたから。

オ 大好きな美術品をもう二度と見られなくなる上に、あこがれていたメトロポリタン美術館からも去らねばならないという悲しみを、ボスに知られたくなかつたから。

問五——線⑤「アーノルド」とありますが、これより前から「アーノルド」を指す表現を八字でぬき出して、答えなさい。

問六 — 線⑥「^{もうじん}盲人の食事」は次のうちどれですか。もっともふさわしいものを一つ選んで、記号で答えなさい。

ア

著作権の都合上、省略
「修行者」

ウ

著作権の都合上、省略
「ハイメ・サバルテスの肖像」

イ

著作権の都合上、省略
「泣く女」

エ

著作権の都合上、省略
「盲人の食事」

問七 aとbに入る言葉としてもっともふさわしいものを、次の中からそれぞれ一つずつ選んで記号で答えなさい。

a

ア あなたの意見はかたよっています

イ わたしはそうは思いません

ウ あなたは何もわかっています

エ 私の考えにあなたはきっと賛同してください

オ あなたのおっしゃっていることはごもっともです

b

ア 体によい

イ 私の知っている

ウ 彼の大好きな

エ たくさんの種類の

オ 彼が初めて飲む

問八 — 線⑦「ピカソは、恵^{めぐ}まれぬ人をして写し取りたかつたわけじゃない」とありますが、ピカソがキャンバスに描きたかつたのはどんなものだと考えられるのですか。これより前から三十字以上三十五字以内でぬき出し、始めと終わりの五字を答えなさい。

問九 — 線⑧「アーノルドは、美青に何か声をかけようとして、やめたようだった」とありますが、この表現からどのようなことが読み取れますか。次の中からもっともふさわしいものを一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 美青とパメラが、まだ目が見えていることを確かめるために、必死にピカソの絵に近づいていっていること。

イ 美青がパメラにピカソの絵をできるだけ間近で見せることで、彼女の苦しみを共有しようとしていること。

ウ パメラが周囲の騒音^{そごおん}に気を取られず、集中して絵を見られるように、美青は神経をとがらせていること。

エ パメラが美青以外の人に対して警戒心^{けいけいしん}を持っており、ピカソの絵を心ゆくまで見るような状態にないこと。

オ 美青とパメラが共にピカソの絵に惹^ひかれ、二人だけの静かで落ち着いた絵の世界に入っていこうとしていること。

問十 Xには同じ言葉が入ります。その言葉とはなんですか。漢字二字で答えなさい。

問十一 美青が企画したワークショップのタイトルは美青の提案で——線Ⅱ「Let's learn with Picasso: Workshop for disabled kids (ピカソと学ぼう——障害を持つ子供たちのためのワークショップ)」から——線Ⅰ「Let's be Picasso: Workshop for kids (ピカソになろう——子供たちのためのワークショップ)」に変更されました。美青はなぜ、ワークショップのタイトルをⅡからⅠに変更したのでしょうか。美青がパメラと出会って気づいたことをふまえながら、理由を答えなさい。

〔三〕

次の(1)、(2)にそれぞれ答えなさい。

(1) 次の慣用語の□に当てはまる動物はなんですか。それぞれふさわしいものを、次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ① □が合う 〈意味〉 気があうこと。
- ② □をかぶる 〈意味〉 本性ほんしょうをかくしておとなしく見せかけること。
- ③ □につままれる 〈意味〉 意外なことが突然とつぜん起こって、わけがわからず、ほんやりする様子。
- ④ □の一声 〈意味〉 みんなに文句を言わせず、言うことをきかせる力のある人の発言。
- ⑤ □のなみだ 〈意味〉 ごくわずかでしかないこと。

- ア いぬ イ ねこ ウ うし エ とら オ うま
- カ つる キ きつね ク おうむ ケ すずめ コ ねずみ

(2) 次の——線について、カタカナは漢字に、漢字はひらがなに、それぞれ改めなさい。

- ① ケワしい山道。 ② セイトウに所属する議員。
- ③ セイカランナーに選ばれる。 ④ レモンや梅干しのサンミ。
- ⑤ 実力をはかるシキンセキとなる問い。 ⑥ キビしい寒さ。
- ⑦ 彼女の考えをシジする。 ⑧ 殺風景な場所。
- ⑨ 情報を取捨する。 ⑩ 道半ばであきらめる。

